

溝口家旧蔵の茶道具拾遺 (二)

宮 武 慶 之

『文化情報学 (第九卷第二号)』では、溝口家の茶道具蔵帳である『新発田御道具帳』(新発田市立図書館蔵)を翻刻し、合致する作品を紹介した⁽¹⁾。また『文化情報学 (第十一卷第一号)』では、その後の調査から、新たに溝口家伝来品と判明した作品と、蔵帳での所載は確認されないものの同家伝来品とする作品を紹介した⁽²⁾。

本稿では、引き続き蔵帳に所載される作品および、蔵帳での所載が確認されないものの同家伝来品とする作品を紹介する。またこれまでに紹介した同家伝来品には「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印があった。蔵印は三種類が確認されるため、これらも併せて紹介する。

一 はじめに

かつて新潟下越地方を治めた溝口家は初代藩主秀勝以降、転封もなく明治維新を迎え、維新後には伯爵に叙任されている。

歴代藩主のうち、四代藩主溝口重雄(一六三三―一七〇八)、十代藩主直諒(一七九九―一八五八)は石州流の茶の湯を嗜み、三代藩主宣直(一六〇五―一六七六)は藤原定家墨蹟を入手して⁽³⁾おり、溝口家は多くの道具を蒐集しコレクションを形成した。

これまでの筆者の研究では、溝口家蔵帳を起点に、蔵帳に所載される作品および、蔵帳には所載されないものの同家伝来品とする作品を紹介

してきた。溝口家の蔵帳に所載される多くの美術品中、茶の湯で使用される道具のうちには十代藩主溝口直諒による箱墨書や添状がある作品が多く存在する。溝口家の茶の湯も含めた文化的活動を研究するにあたり、同家旧蔵の美術品や、直諒による箱墨書や添状を明らかにすることは新たな資料になりうると考える。

『文化情報学 (第九卷第二号)』においては、溝口家の茶道具蔵帳である『新発田御道具帳』に注目し、翻刻して合致する作品を紹介してきた。そのうち蔵帳に所載される作品では古瀬戸茶入銘『溝口胴高』(個人蔵)、瀬戸茶入銘『大概』、中興名物茶入銘『蛭』(畠山記念館)、伯庵茶碗銘『宗節』(泉屋博物館分館蔵)などがあり、今日でも価値の高い作品を所

蔵していることがわかった。

『文化情報学(第十一巻第一号)』においては、扇面蒔絵香合(根津美術館蔵)、桜鯉香合(個人蔵)などの作品が同家伝来品であることがわかった。

その後も引き続き調査を継続したところ、新たに溝口家伝来品であることが判明した作品が多数存在した。これらは野村美術館が所蔵する高麗堅手鉢子茶碗銘《白妙》、時代菊蒔絵棗(個人蔵)、古芦屋霰真形釜(個人蔵)、若狭盆(個人蔵)である。また同家伝来品と考えられ、売立目録において所載が確認される作品として瓢炭斗石州在判、片桐石州作赤楽茶碗がある。

本稿ではこれらの作品を紹介することと併せて、蔵印にも注目する。溝口家の所蔵した作品には「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印が貼られている。蔵印は箱甲部、側面、覆紙のいずれか一カ所に貼られている。これまで同家旧蔵品の調査を行ったところ、その蔵印には輪郭線が異なる三種類があることが分かった。そこで、蔵印の周辺について紹介したい。

本稿では、新たに所在が判明した溝口家旧蔵品を紹介するとともに、三種類の蔵印についても論じることとする。

一 蔵帳に所載される作品

①高麗堅手鉢子茶碗銘《白妙》(野村美術館蔵。図1)

野村美術館が所蔵する高麗堅手鉢子茶碗で、銘を白妙という。これまでに本碗は『野村美術館名品図録』(野村文華財団、一九八四)において紹介されるも、その伝来については言及されていなかった。⁽⁴⁾そこで、同

館の協力のもと調査を行った。

堅手とは『原色茶道大辞典』(淡交社、一九八〇年)によれば「朝鮮茶碗の一種。李朝前期につくられたもの。井戸や熊川と違って磁器質で、土・釉ともに堅い感じがするため、堅手と呼んだものらしい」とされる。また、堅手の鉢子とは『茶器名物図彙』によると、元来は鉢だけで茶碗は作られていなかったようであるが、小さい物を茶碗に転用したものとされる。⁽⁵⁾

拝見したところ総体に磁器質で、見込みの目跡は六ツみられ、全体にピンク色になった部分や鹿子状の斑点となった箇所がある。茶碗の総体は椀形で、外側に轆轤目の跡がみられる。高台は竹節となっており、その内部および周辺には形成時、篋によってできた縮緬皺がみられ、一つの見所となっている。

茶碗を収納する仕服は表地が入子龍巾紋緞子、裏地は金地縞子で、朱墨で「白たへ」と書かれている。

挽家は松平妙閑(康福。一六八六一一七四六)が好んだ周防箱である。⁽⁶⁾この周防箱を包む風呂敷が付属する。

これらを収納する外箱は桐で、箱甲部には小堀宗中(二七八六一一八六七)



図1 高麗堅手鉢子茶碗銘《白妙》
(野村美術館蔵)

により墨書で

白妙 堅手

とある。

外箱の覆紙には「秘」および、溝口家の所蔵品を示す「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印が貼られている。

蔵帳中、白妙の茶碗についてみると「御茶碗之部」には

一 高麗鉢手茶碗 銘白妙 箱書宗中

とあり合致する。⁽⁷⁾

ところで現在、個人が所蔵する小堀宗中筆溝口直諒追憶歌三首《雪月花》がある。この三幅対は、直諒没後に宗中が次代である藩主、直溥（一八一九―一八七四）に追憶歌三首を贈ったものである。歌の為書には、在りし日の直諒との交友が茶会を交えて書かれて、雪月花に因んだ三首が詠じられている。『文化情報学（第十一卷第一号）』では《花》に注目した。

《花》には文久二年の茶会について書かれていた。そのため三幅が書かれた年代は文久二年（一八六二）以降となる。

本稿では《雪》（図2）に注目する。《雪》幅には以下のような記述がある。

雪の御会とて霜月宗中宗本 蓬露

三人まで一会にめされけるなり

御宝なる白たへのうつはをはしめ

名物そろへの御会なりけれハ

宗中

白たへのうつはにもおもふいつくしミ
つもりつもれる雪のふかさを

記述から、直諒が開催した雪を趣向にした茶会に小堀宗中とその子である宗本（一八一三―一八六四）、蓬露（一八一六―一八七六）の親子が招かれた。文中に「三人まで一会にめされけるなり」と書かれることから三人一緒に招かれる

茶会は数少なかったと考えられる。当日の茶会では、溝口家で重宝とされた「白妙」の器をはじめ、多数の名物道具が使用されていたことが述べられる。

《白妙》の茶碗は「御宝なる」とされ、文中の名物道具とは区別されるものの、直諒は重宝としていたことがわかる。

溝口家の蔵帳において白

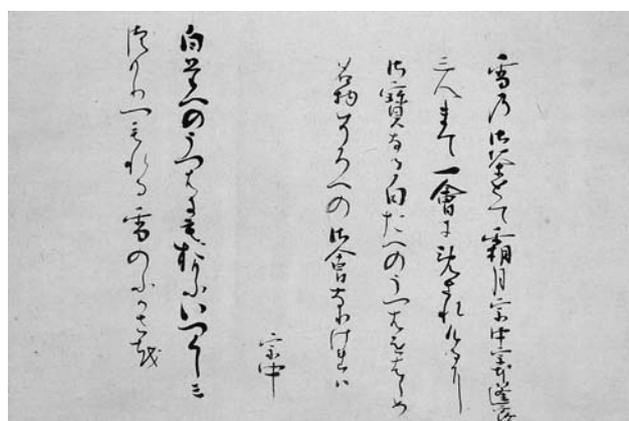


図2 小堀宗中筆溝口直諒追憶歌三首《雪月花》のうち《雪》（個人蔵）

妙を銘とする茶碗は本碗のみであり、本幅で述べられる茶碗は野村美術館蔵品をさすものと考えられる。

②時代菊蒔絵棗 (個人蔵。図3)

現在、個人が所蔵する時代菊蒔絵棗である。棗の形は大棗よりも若干大きく、やや平たい印象を受ける。真塗となった部分があるが経年変化により赤みを増している。金で菊の蒔絵がなされ、花弁は粉溜になった部分



図3 時代菊蒔絵棗 (個人蔵)

や高蒔絵になっている。葉の部分に注目すると二カ所は銀板を棗に貼り、金蒔絵が施されており、質感の変化を狙ったものと考えられる。内側は梨地である。

箱甲部 (図4) には

時代菊蒔絵棗

とあり、筆跡から溝口直諒によるものと考えられる。また箱甲の左下部分には溝口家の旧蔵品を示す「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印が確認できる。



図4 箱甲部の画像

溝口家の茶道具の蔵帳である『新発田御道具帳』には

見廟御箱書

一 時代菊蒔絵棗 袋唐物とんす

がある。直諒の法名が見竜院殿徳巖寿松大居士であったことから、見廟とは直諒のことを指し、本棗に該当する。なお、蔵帳では唐物緞子の仕服が付属するとされるが、現在、付属していない。

③瓢炭斗石州在判 (図5)

明治三十七年 (一九〇四)、溝口家は両国の料亭中村楼において売立を行つて⁽⁸⁾いる。当日は片桐石州 (貞昌。一六〇五—一六七三) 在判の瓢炭斗が出品された。そこで溝口家の蔵帳をみると「御炭斗之部」に

一 瓢炭斗 石州公在判

箱書松平周防守様

并御添書極書共三通

として所載される。これは瓢の上部を切り炭斗にしたものである。

ところで松山吟松庵による美術品移動の記録である『つれづれの友』(個人蔵)では、溝口家の売立において出品された瓢炭斗について以下

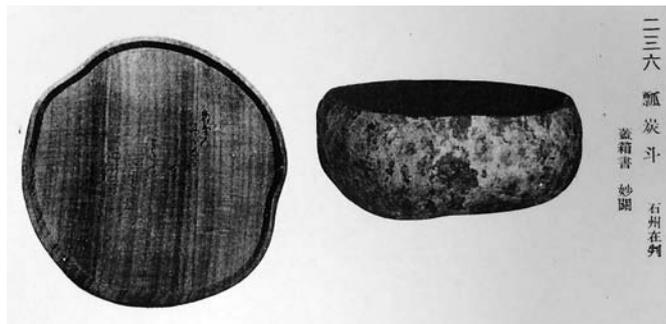


図5 瓢炭斗石州在判

のような記述がある。

井上

一瓢 炭斗 石州書付 三十三円三十三銭

記述から瓢炭斗を購入したのは井上馨（一八三六一一九一五）であることがわかる。⁽⁹⁾

井上馨家では大正十四年（一九二五）十一月九日に東京美術倶楽部で売立を行っている。そのときの売立目録が『井上侯爵家御藏品入札』である。⁽¹⁰⁾ 同書中には

二二六 瓢炭斗 石州在判 蓋箱書 妙閑

という記述と図版（図5）が掲載される。

図版から収納する箱も瓢の上部にあわせて作られていることがわかる。箱墨書の筆者が松平妙閑とされる。妙閑は自分の好みの次第を整え、周防箱とよばれる塗箱や包みに墨書を認めるなど所蔵品の次第を整えた。この箱も妙閑による好みであると考えられる。

④ 片桐石州作赤楽茶碗（図6）

蔵帳中、「御茶碗之部」に以下のような記述がある。

御鼻眞入珍箱御秘蔵

一 石州手造赤楽茶碗 片桐貞昌手造在判

箱書松平周防守康福

この茶碗は、片桐石州による手造の赤楽茶碗である。石州は一畳半の秘伝において赤楽茶碗を用いることを述べており、本碗は石州の茶の湯を考える上でも自作の茶碗があることは貴重である。

茶碗には彫判か漆による在判かは不明であるが、花押があったとされる。箱書は松平周防守康福

（妙閑）とされることから、

本碗を収納する挽家もしくはは外箱は、周防箱であったと推測される。

ところで、赤星弥之助

（二八五三一一九〇四）の没後、

同家は大正六年（一九一七）に三回の売立を東京美術倶

楽部で行っている。そのう

ち第二回目の売立が同年十

月八日に開催された。その

ときの売立目録が『第二回

赤星家所蔵品入札』である。⁽¹¹⁾

同書中には

一七七 石州侯手造赤茶碗 箱松平周防守



図6 片桐石州作赤楽茶碗

という作品記述と図版（図6）が掲載される。このほかにも石州自作の茶碗が存在すると思われるが、赤星家の売立目録の記述をみてみると

茶碗の作者、箱書の筆者ともに蔵帳の記載と合致する。溝口家から流出してからは赤星弥之助が所蔵していたことがわかる。

この茶碗が入手した時期は定かではないが、赤星弥之助は溝口家の売立において《溝口胴高》(個人蔵)、大瀬戸茶入銘《徳永》(個人蔵)、閑極法雲・東潤道洵両筆墨蹟(個人蔵)を購入していることが確認できる。⁽¹²⁾

二 蔵帳での所載が確認されない作品

溝口家の蔵帳中、蔵帳に所載されない作品では花入と香合、炭道具などがあつた。そのため『文化情報学(第十一卷第一号)』で紹介した。その後の調査から、同家伝来品とするも蔵帳に所載されない作品があつたためここで紹介する。

①古芦屋霰真形釜(個人蔵。図7)

桃山時代以前に筑前の葦屋あたりで制作された釜を古芦屋という。その特徴は、肌は絹肌もしくは鯨肌で、やや紫がかつたものもある。また獅子や松竹梅等の地紋がある作品が多く、一部には霰のある作品や無紋の作品もある。また鑲付は獅子もしくは鬼面で、彫りの深い面構えである。

本釜をみてみると、古芦屋の作例に共通しており、霰も先端がやや丸くなつており、均一に鑄出され、技術力の高さをみせている。蓋は一文字で、表面に漆を塗って、よく焼成されたため焦げが景色となつている。摘は梅、座を桜とする。羽落部分も、芦屋の肌の特徴がよく現れている。

箱甲の(図8)右側には墨書で「芦屋 真形釜」とあり、左側下部には溝口家の旧蔵品を示す「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印がある。また、箱側面には後世の貼紙も貼られており、この釜の銘を「飛来山」としている。

『新発田御道具帳』には「釜之部」という項目があるものの、本釜は所載がみられない。このことから、蔵帳に所載されない釜も多数あつたものと考えられる。

なお、これまでの筆者の研究では、釜については売立目録から一点のみ確認したが、現存する同家伝来品の釜は、今回が初めての紹介となる。

②若狭盆(個人蔵。図9)

若狭盆とは内側が朱、裏面が青漆で塗られた四方盆のことだ、かつて若狭の国に渡来したことから、その名がある。

本作は、四力所に亀裂が生じているが、これは古作の若狭盆にみられ



図7 古芦屋霰真形釜(個人蔵)および鑲付



図8 箱甲

る特徴で、竹釘が打たれているためとされ、経年変化によって亀裂が生じたものである。古来より、この手の若狭盆は珍重されてきており、松平不昧による『古今名物類聚』「盆名物」の項をみてみると九枚の盆が紹介されるが、そのうち七枚が若狭盆であり、当時は名物として重要視されていたことが確認できる。

本盆を実際に手にとってみると重量感があり、裏面には畳付が四力所ある。裏面は青みを帯びた塗であり、元時代の作と推定される。

箱甲（図10）には墨書、隸書体で「若狭盆」とあり、古筆了任（一六一〇―一六七三）の極札から東阜心越（一六三九―一六九六）による筆跡とされる。箱甲には溝口家の旧蔵品を示す「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印がある。またその上には丸印で「早春」と書かれた印がある。

溝口家の蔵帳には盆の項目はないものの、同家伝来品であ

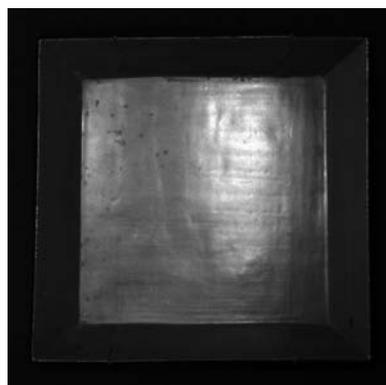
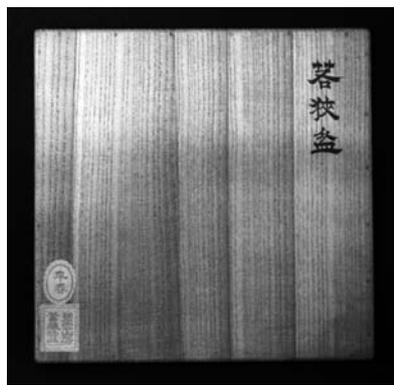


図9 若狭盆（個人蔵）



図10 箱甲



り、主要な名物茶入または香炉などを置く盆として使用されたと考えられる。

ところで明治三十六年（一九〇三）に京都市美術館において開催された古美術展覧会がある。同年に大阪で開催された第五回内国勸業博覧会では、初めて海外からも出品がなされ、事実上日本で初めての万国博覧会となった。京都でも関連の行事として古美術展覧会（京都美術協会主催）が開催された⁽¹³⁾。

同展に溝口家は多数の所蔵品を出品している⁽¹⁴⁾。そのうち盆として出品された作品をみると、抹茶席飾では中興名物茶入銘《蛭》（畠山記念館蔵）を載せた「朱塗盆」、床の間に飾られた青磁七層塔香炉を載せた「曲輪盆」がある。また、髹漆蒔絵器具類の席では「堆黒丸盆」と「若狭塗盆」の二点が出品されている。

出品された「若狭塗盆」とは本盆であると考えられ、同家の主要な道具の一つであったことがわかる。

三 溝口家の蔵印について

溝口家の伝来品とする作品中、特に掛物や茶道具には「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印が貼られていて、箱本体の側面また蓋の甲部に貼られる場合と、覆紙に貼られる場合があった。

これまでの筆者の溝口家旧蔵品調査を行ってきたところ、蔵印は三種類の輪郭線が異なっていることを確認した。

箱などに貼られている蔵印をみると、大抵の作品に貼られる蔵印は、輪郭の四隅が四角およびVの字を上下にして繋いでいる（図11）。

次に多くみられた蔵印は、輪郭線は二重線で四隅が花柄になっている(図12)。この蔵印は先号で紹介した南蛮砂張香箸(個人蔵)にみられた。このほか、現時点では一件が確認される蔵印では、輪郭線が一本線になっている(図13)。この蔵印が貼られる作品は呉須六角台牛香合(個人蔵)である。

ところで今回の調査で明らかとなった若狭盆(個人蔵)の蔵印(図14)に注目してみると、その輪郭線は切手のような目打ちになっていることが確認できる。また、蔵印の輪郭の余白を刀で切ったような場合があることが確認



図11 「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印
古瀬戸茶入銘《溝口洞高》(個人蔵)
の箱側面より



図12 輪郭線が二本となった蔵印
南蛮砂張香箸(個人蔵)の箱より



図13 輪郭線が一本となった蔵印
呉須六角台牛香合(個人蔵)の箱
甲より

できた。

これらの蔵印と共に貼られた印として「秘」の蔵印(図15)がある。これは古瀬戸茶入銘《溝口洞高》(個人蔵)、大燈国師墨蹟《日山之賦》(個人蔵)⁽¹⁵⁾、呉須水鳥香合(個人蔵)にみられた。《溝口洞高》は重雄によって入手されて以後、溝口家に伝来した道具であった。また、大燈国師墨蹟《日山之賦》(個人蔵)は直諒が入手した



図14 若狭盆(個人蔵)の蔵印(拡大)



図15 秘の蔵印
高麗堅手鉢子茶碗銘《白妙》
(野村美術館蔵)の覆紙より

墨蹟で「秘」の蔵印が貼られていた。このことから、家祖伝来の道具や自身が所蔵した道具中、特に重要視した作品に貼られていたものと考えられる。⁽¹⁶⁾「碧雲山房蓄蔵物品」および「秘」の蔵印の経年変化による損傷が同程度であることから、以上の蔵印は十代藩主直諒の時代になって貼られたものと考えられる。すなわち同人の時代に所蔵品の整理分類が行われていたものと推測される。そのためであろうか、蔵帳中には親交のあった小堀宗中(一七八六―一八六七)、宗本(一八一三―一八六四)、篷露(一八一六―一八七六)、吉村観阿(一七六五―一八四八)による箱書

が多く存在している。

蔵印が三種類あったことから、直諒の時代の整理分類の時期の異なりを示すものと考えられる。その時期を考えると、当初は輪郭線が一本になった蔵印を使用し、その後、輪郭の四隅が四角およびVの字を上下にして繋いだ蔵印や、輪郭線が二重線になり四隅が花柄になった蔵印(図12)を使用したものと考えられる。

四 むすび

本稿では、新たに溝口家伝来品として現存する作品では高麗堅手鉢子茶碗銘《白妙》(野村美術館蔵)、時代菊蒔絵棗(個人蔵)、古芦屋霰真形釜(個人蔵)、若狭盆(個人蔵)があった。また売立目録から同家伝来品として瓢炭斗石州在判、片桐石州作赤楽茶碗を紹介した。

これまでの調査から、溝口家の蔵印である「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印には三種類あることが確認できた。

同家伝来品の整理は直諒の時代に行われ、蔵印もその当時に貼られたものと考えられる。

謝 辞

本稿執筆にあたり調査にご協力いただきました野村美術館、個人の御所蔵家、新発田市立図書館、文献調査にご協力いただきました東京文化財研究所、同志社大学ラーネット記念図書館に深謝申し上げます。

図版の出典

- 図1、2、4、7、15 撮影筆者
- 図3 『済美入札会目録』
- 図5 『井上侯爵家御蔵品入札』
- 図6 『第二回赤星家所蔵品入札』

註

- (1) 宮武慶之「新発田御道具帳御にみる溝口家旧蔵の茶道具」『文化情報学(第九卷第二号)』、同志社大学文化情報学会、二〇一四年、四六一―四八頁。
- (2) 宮武慶之「溝口家旧蔵の茶道具拾遺」『文化情報学(第十一卷第一号)』、同志社大学文化情報学会、二〇一五年、二五一―四二頁。
- (3) 横谷一子『「隔冥記」にみる一町人の文芸と古典受容』『仏教大学大学院紀要』第二七号、(仏教大学、一九九九年、一四三頁)には以下のような記述がある。

定家墨蹟の掛物を宣直に届けるため大阪に赴く。
- (4) 野村美術館編『野村美術館名品図録』、野村文華財団、一九八四年、四二頁。
- (5) 永島福太郎監修『茶器名物図彙』、文彩社、一九七六、三二一―三三二頁。
- (6) 中央に当たる部分を溜塗にして縁を囲み、籠地に布張りをして漆を施した箱造である。
- (7) なお詳細については宮武慶之「高麗堅手鉢子茶碗銘《白妙》について」(野村美術館研究紀要(第二十五号))(印刷中)を参照されたい。
- (8) 宮武慶之「明治期における溝口家の道具移動史」『人文第(十四号)』学習

院大学人文科学研究所、二〇一五年、二五二―二七九頁。

(9) 前掲註(8)。

(10) 売立目録『井上侯爵家御蔵品入札』、大正十四年(一九二五)、東京文化財研究所蔵、請求記号美研1008。

(11) 売立目録『第二回赤星家所蔵品入札』、大正六年(一九一七)、東京文化財研究所蔵、請求記号美研551。

(12) 前掲註(9)。

(13) 京都美術協会『旧義裝飾十六色図譜解説書』、京都美術協会、明治三十六年、二頁。

(14) 前掲註(9)。表3参照。

(15) 宮武慶之「新発田藩溝口家旧蔵の大燈国師墨蹟について―物我両忘と日山賦を中心に―」『文化情報学(第九卷第一号)』、同志社大学文化情報学会、二〇一三年、一〇一―一四頁。

(16) 先述の図6にみた茶碗は、蔵帳の記載では「御鼻眞入珍箱御秘蔵」とあり、この作品にも「秘」の蔵印があったものと考えられる。